

Esther の語りの奥にあるもの

—— *Bleak House* に関する一考察 ——

牧 嶋 秀 之

I

Bleak House (1853) の二重の語り手については、今までにさまざまな研究がなされてきた。それらの研究の内容は多様であるが、主流となっている考えは、三人称の語り手は Dickens に近い人物であり、一人称の語り手 Esther は身の回りに起こったできごとを(一人称でありながら)客観的に述べる役割を持っている、とまとめることができるだろう。¹

なぜ Dickens がこのような二重の語り手を用いたのかという点に関しては、Dickens は特に何も語っていない。書簡にも記されていないし、友人の John Forster に語った形跡もない。しかし、前作 *David Copperfield* (1850) で初めて一人称で小説を書き、それが成功したために、Dickens は再び一人称で書く意欲を感じたのであろうと想像することができる。おそらくそれが、従来の三人称の語り手と共に一人称の語り手を登場させた理由のひとつであろう。

Esther の語りは、自分の生い立ちから始めて、語っている時点の7年前までの事件を書いたとされる一種の自伝である。自伝だという点でも *David Copperfield* と共通している。しかし、David と異なり、Esther は自分の行動や感情は控えめに語るだけである。そして先に述べたように、見たこと、聞いたことのレポーターのような役割を果たすのだ。そのために、作中人物としての Esther は、あまりにも慎み深く退屈だという批判を受けることもある。² しかし筆者には、Esther の感情を抑制した語りの中に、彼女の豊かな人間性は自然にあふれ出ているし、彼女の語りの中にこそ Dickens がこの小説で書きたかったことが含まれていると思われるのだ。しかも Esther が直接語っていないことにこそ重要性があると考えるのである。そこでこの小論では、Esther の語る内容に注目し、その奥にあるものを考察してみたい。

II

Esther は、ヴィクトリア朝期の理想的な女性的美徳の一つである慎み深さを持っている。例えば、Richard と Ada が愛し合い、将来を約束したとき、Esther は二人と次のような計画を立てる。

I was to be Ada's bridesmaid when they were married; I was to live with them afterwards; I was to keep all the keys of their house; I was to be made happy for ever and a day. (164; ch. 14)³

つまり、自分の結婚を考えることなく、友人たちの幸せを見守っていたいというのだ。Esther の語りを読むときには、彼女のこの慎み深さを考慮に入れて、実際の人物像を読み取る必要があるだろう。言い換えれば、Esther の人物描写を読むときに、彼女が批判的なことを言っていない、その中に読者が彼女の批判的な目を読み取ることができる場合があるということである。

Skimpole が良い例である。彼は金に関して無頓着で、買ったものに対して金を支払わなくてはならないという概念さえも持ち合わせていない。絵を描き、音楽を奏でることのみ喜びを感じている男である。Esther は例えば次のように彼の言動を詳しく語る。

On the journey he [Skimpole] had a very good appetite for such refreshment as came in our way (including a basket of choice hothouse peaches), but never thought of paying for anything. So when the coachman came round for his fee, he pleasantly asked him what he considered a very good fee indeed, . . . and left Mr. Jarndyce to give it him. (219; ch. 18)

Skimpole はこのように結局 Jarndyce に支払わせることが多い。Esther は Skimpole の行動を、自分の意見を交えずに語っている。

饒舌によって相手をあきれさせる彼は、自分のことを「子供だから金

のことは何もわからない」と繰り返し言うが、これは欺瞞である。通常、子供は金のことには敏感で、物を手に入れるには金を払わなくてはならないことを知っている。それを「子供だからわからない」と言うのは狡猾な大人の策略である。

この小説では、「金による悲劇」が一つのテーマになっていると言えるだろう。大法官裁判所で延々と続く Jarndyce 対 Jarndyce 事件の裁判も、その内容は遺産をめぐる人々の争いであって、その裁判に係わる人々は大金を手に入れることを夢見て破滅してゆく。Skimpole は、Jarndyce 裁判には関係していないものの、「社会生活と金」に関して一つの問題提起をしている。彼は、何も知らないどころか金の力を熟知していて、無知を装いながらじつに巧みに金の問題を切り抜けて行く。Esther は彼に対して批判的な事は述べない。周囲の人間が彼の金銭問題の後始末をつけるためにいかに苦慮したかを淡々と述べるだけである。

経済観念がなく、無責任で意志薄弱な男、というのは、*David Copperfield* の Micawber がそうであったし、のちの *Little Dorrit* の William Dorrit につながる。Skimpole は彼らと同一線上にあると考えてよいだろう。三人は饒舌である点でも共通している。常識的な枠を越えた考えをとめどもなくしゃべるので、周囲の人間は笑い、あきれ、怒りだす。Dickens は彼らを憎めない人物として描いているが、彼らに対する Dickens の批判的な目は明らかである。彼らが Dickens の父親をモデルにしているということを除外しても、Dickens が繰り返しこういう人物を登場させ、書かずにはいられないということが、彼の一つのトラウマを明らかにしているといえるだろう。

Esther は、誰に対しても自分の評価、判断を控える語り手なのではない。例えば、アフリカの慈善事業に没頭して家庭をかえりみない Mrs. Jellyby について、Jarndyce に尋ねられたので次のように語る。

“We rather thought,” said I, . . . “that perhaps she was a little unmindful of her home.” . . .

“We thought that, perhaps,” said I, hesitating, “it is right to begin with the obligations of home, sir; and that, perhaps, while

those are overlooked and neglected, no other duties can possibly be substituted for them.” (60-61; ch. 6)

いかにも Esther らしい控えめな言い方である。このように、Esther は促されれば自分の意見を述べる。決して自分の考えがないわけではない。Skimpole に対する意見を求められればためらいがちに語ったことだろう。

III

Esther は、敬愛する Jarndyce についてはどのように語っているのだろうか。Skimpole の場合と異なり、Jarndyce の描写には Esther の愛情が感じられる。Esther は Skimpole らと談笑している Jarndyce を次のように描写している。

His look was thoughtful, but had a benignant expression in it which I often (how often!) saw again: which has long been engraven on my heart. (68; ch. 4)

‘how often’ が強調されていることに注意したい。Esther には Jarndyce の優しい表情が深く心に刻まれているのだ。

しかし、Esther の語りを通して描かれる Jarndyce は、Dickens の小説にしばしば登場する善意だけで成り立っているようなお人好しの人物とは異なる。機嫌が悪くなれば「東風が吹いてきた」と言い、人から感謝されるのが嫌いで、感謝されそうになると逃げ回るという奇癖の持ち主でさえある。世話をすべき被後見人に対する気配りは実際的である。例えば、彼は Skimpole の抜け目なさをきちんと見抜き、Skimpole の借金を立て替えた Richard と Esther、そしてそこに居合わせた Ada に、Jarndyce は次のように言う。

“However, Rick, Esther, and you too, Ada, for I don’t know that

even your little purse is safe from his [Skimpole's] inexperience — I must have a promise all round, that nothing of this sort shall ever be done any more. No advance! Not even sixpences.” (75; ch. 4)

おそらく Jarndyce は、Skimpole に対して容認する限度を決めていたのだろう。自分が彼に代わって支払いをすることは構わないが、それ以上は許さない、という態度である。Jarndyce は「Skimpole は子供だからしかたない」と日頃言って彼の金銭的な無軌道を許しているが、実際は Skimpole が子供のふりをしているにすぎないことを知っているのだ。それで Richard たちに注意をしたのだが、残念ながら Richard にはそれがわからず、彼はこの後も際限無く金を立て替えてしまう。

Esther の語りの中で、Jarndyce が「不平を言う部屋」(the Growlery)を必要としている点は重要である。彼が Esther たちに見せているのは表の顔であり、抑圧された感情を吐きだすための場所が彼には必要だったのだ。Jarndyce は「不平を言う部屋」の中で Esther にこのことを説明する。

“This, you must know, is the Growlery. When I am out of humour, I come and growl here.”

“You must be here very seldom, sir,” said I.

“O, you don't know me!” he returned. “. . . . The Growlery is the best-used room in the house. You are not aware of half my humours yet. My dear, how you are trembling!” (87; ch. 8)

Esther が震えているのは、Jarndyce が自分をさらけ出す場所へ彼女を入れてくれたことをうれしく思っているからだ。彼は、Esther たちとともに数週間ロンドンに滞在したときでも臨時の「不平を言う部屋」を必要としていたほどである。この事実は、それだけ彼にとって抑圧された感情が強いことを示している。

Jarndyce が「不平を言う部屋」でどのような叫び声をあげていたのか

は語られていない。Esther もそのことは知らなかったはずである。しかし読者が Jarndyce の影の部分の推測することによって、彼の性格はふくらみ、リアリティを持つことになる。精神分析学の知識がなかった19世紀なかばに、Dickens がこのような人物造型をしたことは、彼の人間理解の深さをうかがわせる。

Jarndyce が人形のような平板な人物ではなく喜怒哀楽を持つことがわかれば、Esther の語りの中には全く描かれていない彼の感情の動き、例えば彼が Esther に対する愛情を抑えていた間にどれほど苦しんだか、ということを読者は共感をもって想像することができる。

Jarndyce は Esther に最初に会ったときから彼女を愛していた。その愛情は、後見人が被後見人を愛する気持ちとは違い、男女の愛情である。彼はその愛を隠し続ける。Esther は全くそれに気づかない。Jarndyce が Esther に会って間もないころ、彼女に対して「私は君の後見人兼友人になれるだろう」と言ったのを、Esther は言葉どおりに受け取っていたのだ。彼女は Jarndyce のことを「もしかしたら自分の父親かもしれない」と思っていたほどである。Esther は過去の出来事を回想して語っているので、彼女自身に関する限り全知の語り手であるが、彼女は時間の経過順にしか語らないため、読者は、小説の後半で Jarndyce が求婚するまで、愛を隠す彼の胸の苦しさを読み取ることはできない。

Jarndyce は、Esther にあてた求婚の手紙の中でさえ理性的な態度をくずさない。Esther は手紙に書かれていないことをいろいろ考える。つまり Jarndyce がずっと彼女への愛を抑えてきたこと、彼の愛は、彼女の出生や顔の美醜に関係のないこと（彼女の顔には天然痘の傷が大きく残った）などである。読者も、ここで Jarndyce の長い間の心の葛藤を理解することができる。彼が保護者としての立場をくずさなかったからこそ、Esther が安心して暮らしてこられたこと、そして Allan Woodcourt への愛を育てられたことを考えると、Jarndyce のとった態度がいかに正しかったかがわかるのだ。

このような Jarndyce の心の動きは Esther の語りの中には直接書かれていないが、それを読み取るとはこの作品を理解する上で必要であろう。

IV

テキストの中で Esther 自身のことはどのように語られているのであろうか。まず彼女の恋愛問題を取り上げてみたい。Esther を語り手としてではなく一人の登場人物としてみた場合、彼女の恋愛問題は彼女の心の中で大きな位置を占めていたと思われるからだ。

もともと彼女は、自分のことを語ろうとしてこの物語を書いたのではないことは、この語りの最初に述べている。

It seems so curious to me to be obliged to write all this about myself! As if this narrative were the narrative of my life! But my little body will soon fall into the background. (27; ch. 3)

積極的に自分のことを書こうとしたのでない以上、彼女の心の動きが詳細にわたって書かれていないのは当然である。Esther の自分自身についての語りに関しては、彼女の謙譲の美德とともに、この点を考慮しなければならない。また、Esther が自分の恋愛感情について語る部分を読む場合は、さらに彼女の羞恥心にも注意をすることが必要である。彼女は、ほかのことを語るよりかはるかに遠回しに、恥ずかしげにそれを語るからだ。

Esther は Jarndyce の求婚を受け入れるが、Jarndyce はその後、Esther が Woodcourt を愛していることに気づいて身を引く。それで、Esther は結局 Woodcourt と結婚する。Woodcourt については、Esther は彼が登場する場面ではきわめてそっけなく語るだけである。まるで無関心であるかのような書き方である。

I have omitted to mention in its place, that there was some one else at the family dinner party. It was not a lady. It was a gentleman. It was a gentleman of a dark complexion —— a young surgeon. He was rather reserved, but I thought him very sensible and agreeable. At least, Ada asked me if I did not, and I

said yes. (163; ch. 14)

この部分を読む読者は、名前も明らかにされないこの医師が、やがて Esther と結婚するとは想像できないであろう。Dickens は、この小説ではさまざまなことを謎にして、明らかにしないまま物語を進めるという手法を使っている。Woodcourt に関することも、あえて読者に隠しておこうという作者の意図があるのはもちろんである。しかし、Woodcourt の描写はそうした手法の単なる一例ではない。むしろ Esther が自分の恋愛感情の描写を極度に控えているのであろう。Woodcourt が Esther を愛していたことは、彼女が明らかにしている。しかし、それも「Woodcourt さんは私を愛しているのだ、と時々感じていました (ch. 35)」というだけで、二人のあいだにどういうことがあったのか、なぜ Esther は彼が自分を愛していると思ったのかは不明である。

物語の後半になっても、Woodcourt への思いを語る Esther は、相変わらず遠回しである。Jarndyce から求婚の手紙を受け取り、Esther は喜びと感謝で震えるが、そこで彼女はひどく泣いてしまう。Jarndyce に対する感謝の気持ちを表す良い機会ではないかと自分に言い聞かせて、なんとか泣き止むが、なかなか落ち着くことはできない。泣いた理由は、「はっきり言うことができないような何かを永久に失ったように思えた」からだ (ch.44)。そのすぐあとで彼女は、以前 Woodcourt からもらい、すでにしおれている花束を燃やしてしまうので、その「何か」とは「Woodcourt との愛」、あるいはもっと具体的には「彼との結婚」をさしていることがわかる。Jarndyce に対する感謝の念がいくら強くても、Woodcourt を愛する気持ちに換えることはできないのだ。

Dickens は、Esther が Woodcourt への愛を遠回しながら語り、また上の場面では彼女が漠然とした理由で泣くことによって、恋愛のような強い感情の動きは、理性で抑えようとしても抑えることができないことを示したかったのではないだろうか。

Esther は、自分の性格については「内気だ」と言う。たしかに話す言葉はためらいがちである。しかし、彼女は決して性格の弱い女性ではない。⁴ Skimpole が Jarndyce にだけでなく、しだいに Richard にも借

金を重ねていったとき、Esther は Richard と Ada の夫婦が貧しいのを知っているために、Skimpole に対して、もう二人の家にはいかないように忠告する。Skimpole は得意の弁舌をふるって Esther をけむに巻こうとするが、彼女は「目を上げ、彼をまともに見つめて」言うべきことを言いきるのだ (ch. 61)。

Esther の人間性がよく表されているのは、彼女が天然痘にかかったときである。彼女は病気の苦しさについては何も語らない。まわりの人間が嘆いたり、Guppy があわてて求婚を取り消しにきたことを静かに語るだけである。しかし天然痘は、彼女の容貌を変えただけでなく、彼女の人生そのものを大きく変えるような事件であったはずだ。T. Gaughan が述べるように、彼女の顔は彼女の identity の唯一の確かなより所だったからだ。⁵ 自分の出生についてははっきりしたことを知らされず、孤児だと思いきまされて育った Esther にとって、自分の identity を明らかにすることは人生の重大な関心事であったことだろう。ところが彼女は生まれ持った顔を失い、identity を主張するすべを失ってしまったのだ。

こういう打撃を受けながら、Esther は顔の傷を前向きに考える。Lady Dedlock から自分の出生について告白されたとき、もはや自分は母に似ていないので母に恥をかかせることはない、神の摂理に感謝したい、と考えるのだ (ch. 36)。

彼女は現在の事を語る 67 章で、自分の顔に言及している。夫の Woodcourt が話しかける。

“And don't you know that you are prettier than you ever were?”

I did not know that; I am not certain that I know it now. But I know that my dearest little pets are very pretty, and that my darling [Ada] is very beautiful, and that my husband is very handsome, and that my guardian [Jarndyce] has the brightest and most benevolent face that ever was seen; and that they can very well do without much beauty in me — even supposing — (770; ch. 67)

最後の 'even supposing' は、「もしかしたら以前より本当にきれいになったのかもしれない」というふくみであろう。ここではまことに歯切れの悪い表現ながら、彼女が実はさらに美しく生まれ変わった可能性をほめかしているのである。

V

Esther と彼女の語りに関し、「彼女は子供の頃に愛されなかったために精神的な傷を受け、彼女の語りはその傷を示す奇妙な癖が目立つ」という一連の批評がある。⁶ 彼女の自己非難や犠牲的精神をとりあげて、神経症的な性格だというのである。しかし、彼女が反省ばかりしているように見えるのは、自分の苦しみや悲しみをあえて語らないからだ。また、神経症の人間にはたして Esther のような冷静な語りができるかどうか疑問である。本論で再三述べたように、彼女は自分の感情はなるべく隠し、つとめて平坦に語ろうとしている。しかも彼女の人物描写は会話が多い。会話は人物の言葉があらのままの形で提示されるので、彼女の意見の入り込む余地はない。こう考えると、Esther の語りは十分客観的で、事実として信頼できると言えるだろう。そうであれば彼女に「神経症的」という枠をはめる必要はない。仮に Skimpole が語り手であればどうであったかを想像してみればよい。彼が書き、彼の死後に出版された本には、Jarndyce を「私利私欲の化身」「the Incarnation of Selfishness」だと記してあるのだ (729; ch. 61)。このような人物の語ることを信頼することはできない。

Esther は一人称の語り手として制限された役割の中で、制限された範囲のことを語った。また、彼女の語り口は、感情が抑制されているために平板である。しかしそこで語られている内容は奥行きが深く、その平板な語り口に積極的な意義を見いだせるのである。

(1994年 11月)

注

1. 例えば W. J. Harvey, "Character and Narration." *Character and the Novel* (London: Chatto & Windus, 1965) を参照.
2. Sylvère Monod, "Esther Summerson, Charles Dickens and the Reader of *Bleak House*." *Dickens Studies* 5 (Boston, MA: Emerson College, 1969) 17.
3. *Charles Dickens, Bleak House A Norton Critical Edition* (New York: W. W. Norton & Company, 1977). 以下、テキストからの引用はすべてこの版により、章、ページ数は本文中のここ内に示した。
4. Charlotte Brontë は Esther を「性格が弱く、語りが冗漫」だと述べている。Philip Collins, ed., *Dickens: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 273.
5. Richard T. Gaughan, "Their Places are a Blank": The Two Narrators in *Bleak House*." *Dickens Studies Annual* 21 (New York: AMS Press, 1992) 90.
6. Michael Slater, *Dickens and Women* (London: J. M. Dent, 1983) 255-56 を参照.